インド・ムンバイにて

掲載誌・掲載年月：日本海事新聞 202403

日本海事センター 企画研究部
上席研究員　野村　摂雄

NYK インディア
取締役　後藤　慶成

1. はじめに:インドの船員教育

2024 年 1 月にインドに赴き、海事行政を担う海運総局や、日本のいわゆる機関承認校でもある TMI 及び MANET、また、TS Rahaman などを訪問して、インドにおける船員教育機関をめぐる状況等についてヒアリング調査を行った。

その結果の一端を紹介すると、目下インドでは、船舶職員養成を行う高等教育機関が 47 校あり、そのうち 24 校が 3 年制の航海士養成課程、28 校が 4 年制の機関士養成課程をそれぞれ設置している（一部教育機関は複数を設置している。）。日本商船隊に多く乗り組んでいると言われる船舶料理士を養成する課程は、20 校が提供しており、2023 年度の入学者数は 2,023 人であった。

これら船員教育機関に対する海運総局による監督は、総じて厳格である（その関連プログラムについては拙稿「インドの船員教育」本紙 2019 年 10 月 1 日参照）。そのため教育機関は、学生の出席のみならず教員の出勤についても毎日カメラ及び IC チップで記録し、海運総局による定期的な確認を受け、学生は、授業に 100%出席することが単位取得の前提となっている。海技試験もまた厳格であり、合格率は 5%から 10%とのことであった。

インドは、2004 年財政法によりトン数標準税制を導入しており、適用船社は船員訓練義務を果たさなければならない。それに関連して設立されている海事訓練トラストは、女性船員の育成に対する補助金を支給しているとのことで、女性蔑視の風潮が指摘されがちな同国にあって興味深い取り組みであり、いつか詳細を論じたい。

ところで今般出張では、邦船社の現地スタッフをはじめとするインド人のみに囲まれて 1 週間を過ごした。小生にとってインド出張は 5 回目となるが、日本人同行者がいないのは初めてのことで、毎日朝から晩までインドの人と社会に独りで浸った。そこでは改めて驚きをもって日本や他の国との違いに気づかされることばかりで、毎分毎秒刺激を受け、徐々に麻痺し、そして慣れた。と思った矢先に、片側 4 車線の高速道路を横切る複数の人影に目が点になるということの繰り返しであった。インド現地を知らない日本人にはどうやってこの様子を伝えられるだろうかと思案し、単純なところはスマホ動画で示すことはできるものの（インド人はイエスの返事として首を振るのが本当かと以前問われたことがあったので、実際には頭を傾げるような動作、それも人によって多様であることを今回の面談者をモ

デルに撮影した。)、この社会全体を包含している、あるいは構成しているものを伝えるのは、わずかな滞在経験しかない自分には無理だと悟った。

そんな中、これもインド人の特徴である臨機応変さと徹底的な親切心によって、NYKインディアの取締役として当地に赴任中の後藤慶成さんとお会いすることになった。後藤さんは、2018年4月から4年間にわたり日本船主協会（船協）の政策幹事（途中に会長秘書及び政策幹事長など兼任）をお務めの間、船協と当センターとの間の海運強化策に関する意見交換の場を通して、特に小生は諸外国のトン数標準税制調査についてご指導を賜った方である。インド人が移動中に後藤さんに電話をしてくれ、その晩にお会いした後藤さんのお話は、赴任以降のご経験からエピソードに富み、まさにインドの人や社会を知らない方がそれを想像し、理解するに役立つもので、更に独自のメッセージを持っていた。

多くの世界的な大企業のトップをインド人が務めていることはもちろん、海事社会においてもインド人が活躍していることは広く知られている。そんな彼らと彼らが生まれたインドを理解する一助として、後藤さんに次節を執筆いただいた。紙幅の都合で一部割愛せざるを得なかったのが残念至極である。

2. インド駐在経験から

(1)インド体験適齢期

女優の菅野美穂さんは、これまでで人生が激変した出来事を問われ、間髪入れず「インド旅行」と即答していた。「強烈でした。頭をパカッと開けられて、脳みそをぐしゃぐしゃと素手で触られているような衝撃を受けました」、「インド旅行は 26 歳が適齢期」と言及。「26歳で行くと人生がいいバランスになる。あまり若くして行ってしまうと、強烈すぎる」と語り、一度はインドへ旅行すべしと勧めていた。

確かに、社会人となり一定の年数を経て、基本的な分別を身に着けた段階であれば、インドのような異次元の環境を体験しておくことはなかなか有益だと思う。そして私流にもう一つ付け加えるならば、「人生にくたびれ始めた 50 代の中高年こそ、第二のインド体験適齢期」と、声を大にして言いたい。

(2)ムンバイ

私の居住するムンバイは、一般に治安は良いのだが、至るところに広がるスラム街の存在に圧倒され、また、どの車もクラクションを終始けたたましく鳴らしながら走り、パッシングも当たり前。そんな車が多数行き交う大通りを、歩行者は信号も横断歩道もないのに強引に横断していく。中には、大きな“だいはちぐるま”に商品を載せ、手で押しながら歩いて横断するツワモノも。スキあらば左右から飛び込んでくる車やバイク、縦横無尽に好き勝手に走り回るオートリキシャー、果てには、なんと逆走して向こうから突進してくる車など、もう片時も油断出来ない。片側 3 車線の道路に車 5 台が無理やり横並びにひしめき合って走る。道端を 10 分も歩けば靴は土ぼこりで汚れ、気を抜くと車にひかれそうになる。車にばかり気を取られていると、今度は道端に落ちた犬のフンを踏んでしまいそうになる。野良

犬はそこらじゅうにいるので、噛みつかれないように気合い（?）が必要だ。インドでは一事が万事、こんな調子だ。

だからこそ、中高年よ、インドに来たれ!! と私は言いたい。ここに来たからにはもう、四の五の御託を並べて理屈っぽいことを言ってなどおられない。平和で安心で秩序立った日本のように、ぼーっと過ごすことなど許されない。常に何が起こるか分からない。だからここは、開き直って一発ぶちかませ!! 気合いを入れろ。インド人と相対するときは、はっきり大きな声で自己主張しよう。納得できないことはズバリ“NO”と言おう。相手の顔色など気にするな、忖度など無用。

(3)人懐っこさから日本語ことわざ勉強会へ

一見すると、あらゆることがハチャメチャな印象を受けるインドだが、私が接する限りのインド人は皆、すこぶる親切である。それはもうお節介なくらい親切で、私が店を探してウロウロしていると、通りがかりのインド人が寄ってきてお店まで案内してくれる（ちなみに見た目は相当コワモテ。）。行きつけのレストランでは、「いつも同じメニューばかりでは飽きるでしょう?」と言って、時々メニューにないものまで作ってくれる。もはや家族のような有り難い存在だ。私がホテルの ATM 機に忘れたキャッシュカードがフロントに届いていたことだってある。

インド人の人懐っこさも、エピソードに事欠かない。会社で健康診断を受けたあと、インド人の同僚（50 代男性）に聞かれた。「後藤さん、どこか悪いところはありました？」、「うーん、少し血圧が高いくらいかな。」、「お金持ちはみな美食家だから、血圧高いですよね。」、「ちょっと待って、みんなの前でからかわないでよ。笑」。

その数日後、彼が私の部屋に入ってきた。何やら紙袋を持っている。「先日は不謹慎な冗談を言ってしまい、申し訳ありませんでした。」、「え、何のことですか？」、「お金持ちは血圧が高いなどと。。。」、「そんなの全然気にしてないよ。」、「これ、お詫びの印に受け取って下さい。インドのチョコレートです。」、「いやいや、私はあなたのジョークにいつも楽しませてもらっている。あなたはそのスタイルを何も変える必要はないし、これからも、いつもどおりのあなたでいて下さい。また面白いジョークを期待していますよ。」と言ったが、どうしても受け取ってほしいとチョコレートを置いていった。

さらにその 1 か月後、また彼が私の部屋に入ってきて、“Ikigai” “Wabi-sabi” “Nin-tai” などと書かれた紙を見せ、「実は最近、日本文化にすごく興味があり勉強しています。言葉の意味やその背景となる考え方がこれで合っているか、添削して頂けませんでしょうか。」と言う。どうやら彼は、人生を生き抜く「解」を日本文化に求めているようだった。そんな彼から教わった日本語もある。それは「桜梅桃李（おうばいとうり）」であり、簡単に言えば、人それぞれ良さは異なるのだから、自分を人と比べることなく、自分の良さを大切にしよう、といったような意味で、彼のお気に入りの言葉だそうだ。

もっと日本語のことわざを教えて欲しいと言うので、彼にはまず「隣の芝は青く見える」という言葉を紹介した。日本のことを評価してくれるのはとても嬉しい。一方で、インドに

も同じように素晴らしい文化が沢山あるのでお互いに良いところを学びあおう、と伝えた。それ以降、もう一人のインド人（同じく 50 代）が加わり、日本語ことわざ勉強会が始まった。「情けは人の為ならず」、「困ったときはお互い様」、「実るほど、頭を垂れる稲穂かな」、「負けるが勝ち」等々。インドにも似たような意味の教えはいくつかあるそうだ。次は彼らにヒンズー教の要諦を教えてもらいたいとお願いしている。

(4)私のコミュニケーション

インドの人々の多くは敬虔なヒンズー教徒であり、「輪廻転生」を信じている大人も少なくない。だから私もインド人部下と話す際は、「より良い来世のために、徳を積むことが仕事においても大切だよね」などと大真面目である。そしてそのことが日本郵船の掲げる ESG ストーリーにもつながる。即ち、「徳」の向かう先が地球であれば “E”、人であれば “S”、「徳」で仕事を回す仕組み作りが “G”といった具合だ。

そしてもう一つ、私は英語が決してそれほど上手ではないが、その代わりに最高のコミュニケーションツールを意識して多用している。それは「笑顔」である。いつも、努めて相手の良いところを見つけては笑顔で褒める。日本語だと恥ずかしくて言えないような表現も、英語なら大袈裟に言うことが出来る。”absolutely fantastic !!” “I’m feeling great !!” 今日もそんな言葉で一日が始まる。

しかしこれを継続するには、ちょっとした「覚悟」と「忍耐」が必要だ。人間誰しも、気分の良くないときもあれば、落ち込むときだってある。そんなときこそ、尚更大きな声で、飛び切り上等の笑顔で “I’m pretty good”と言おう。そう心に決めている。インド人は日本人よりも表情が豊かだ。こちらが少しでもネガティブなことを言うと、たちまち彼らの表情が曇る。そんな顔は見たくないし、こちらも申し訳ない気持ちになる。笑顔で話しかければ、倍の笑顔が返ってくる。笑顔溢れるインドの人々との会話は、いつも明るくて楽しい。貴重な私の心の活性剤だ。彼らにはいつも感謝している。

(5)許容し合う文化

日本が、「他人に迷惑を掛けまいとする文化」であるならば、インドは「お互いの迷惑を許容し合う文化」とでも表現しようか。人に迷惑を掛けまいと汲々としているインド人は見たことがない。皆が好き勝手に行動しており、その分、他人の迷惑行為にも気を留めることなく寛容である。自分に甘い分、他人にも厳しくないのがインド流だ。そんなインドの人々の幸福度は、むしろ日本人よりも高いようにさえ感じる。

彼らに見習うべき点は素直に、謙虚に見習おう。人には親切にしよう。お互いの迷惑は大らかにやり過ごそう。完璧主義や減点主義からは少し距離を置いて、出来ることから少しずつ始めよう。そんなことを考えていたら、故赤塚不二夫さんに対するタモリさんの弔辞が頭に浮かんだ。 「あなたの考えは、すべての出来事、存在をあるがままに、前向きに肯定し、受け入れる、それによって人間は重苦しい陰の世界から解放され、軽やかになり、また時間は前後関係を断ち放たれて、その時その場が異様に明るく感じられます。この考えをあなたは見事に一言で言い表しています。すなわち『こ

れでいいのだ』と。」

そうだ、もしもバカボンのパパがインドに駐在していたら、「これでいいのだ」とばかりにインド生活を誰よりも謳歌するのではないか、きっとそうに違いない。よーし、自分も負けてはいられない（笑）!!　そんな風に考えれば、いつの間にか夢や目標を見失った中高年も、少しは背筋がシャキッと伸びるのではないか。私はこの考えをインド人相手に英語で説明する際、「人生の Re-activation（再活性化）」と呼んでその効能や必要性を説き、だからインド訪問は 50 代が良いのだと力説して、インドの奥深い素晴らしさ（?）に言及している。

とあるインド人社長にこの考えをお話したところ、彼はこのことを“デタッチメント”、即ち、俗世の苦しみから解脱するヒンズー教の教えにも通じるものとして大いに関心を示して下さった。“デタッチメント”の象徴とされる蓮（ハス）は、泥沼の中から真っすぐ伸びて神々しい花を咲かせる。我々も、日々起こる様々な出来事に心を乱されることなく、真っすぐ大らかな気持ちで、お互いの長所に意識を当てて人生を楽しもう、という趣旨のようだ。インドの人々から教わることは実に多い。

自分がこの年齢でインドに来たことには、何か大いなる意義があると感じざるを得ない。この不思議なご縁に、心から感謝している。このインドで自分の人生は確実に、“再活性化“されつつある。この頂いた御恩を、残りの人生でどうお返ししていこうか。どのように生かして、これからインドや日本、いや世界中の、自分の周囲の皆さんと喜びを分かち合っていけるのか。これは自分の使命だ。そんなことを考えながら、さあ今日も一日、自分の目の前に現れる、一人でも多くのインド人を笑顔にしよう。そんな人生は実に心豊かで楽しいものだ。

【参考：車線に構わないムンバイの一般道】

（野村撮影）

野村摂雄（本稿 1 執筆）のむら・せつお　98（平成 10）年上智大法卒、同大学院法学研究科博士後期課程単位取得満期退学、同大学法学部助手を経て、07 年 4 月に日本海事センターへ。23 年 10 月から現職。74 年 2 月 19 日、神奈川県生まれ。
後藤慶成（本稿 2 執筆）ごとう・よしなり　91（平成 3）年慶應義塾大経卒、日本郵船（株）入社。2018 年 4 月 1 日～2022 年 3 月 31 日 日本船主協会 政策幹事うち 2021 年 7 月 1 日～2022 年 3 月 31 日までは政策幹事長就任 1968 年 4 月 16 日、東京都生まれ